

トルコ語『観音経』写本の研究続編
— *Quanši-im pusar* と *Quanši-im bodistv* —

小 田 壽 典

は じ め に

本稿は本誌 34 号 (1991) に発表した「トルコ語『観音経』写本の研究」[小田 1991] の続編である。さきに A, B, C, D, E, F の 6 写本を紹介し、2 系統のトルコ語訳を推測した。その後、1994 年にベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーのシンポジウムにおいて、“A Fragment of the Uighur Avalokiteśvara-Sūtra with Notes” (Juten Oda: 229–243) と題して上記の F 写本について報告した¹⁾。そのとき当該研究所に所蔵される未発表写本の研究を許された。帰途にロシアのサンクトペテルブルクに立ち寄り、上記 A 写本を点検する機会をえた。ついで 1996 年にアンカラでトルコ言語学会があって、“Kuanši-im Pusar ve Kuanši-im Bodisatav üzerine” と題して上記の未発表写本を含めて概要を述べた²⁾。漢語「観世音菩薩」に対応するトルコ語に *Quanši-im pusar* (Kuanši-im Pusar) と *Quanši-im bodistv* (Kuanši-im Bodisatav) の 2 系統があり、第 1 訳と第 2 訳を識別する用語とみなしてよいことを論証した。そして東京の東洋文庫に収納されたサンクトペテルブルク資料のマイクロフィルムより断片の 1 点を第 2 訳に加えることができた [梅村ほか 2002: 92, SI Kr. II 11/1 (R 33/375–378)]。いまだトルコ語の両訳の復元は不十分であり、とくに第 2 訳はせいぜい 50% にすぎない。しかしながら筆者はこのあたりで一応の区切りをつけて、テキストの復元とトルコ言語文化史の側面に言及して課題を提起したい。

なお 2005 年にユーラシア文化研究センター (羽田記念館) で行われた第 23 回研究会で、ブランデンブルク科学アカデミーのツィーメ (Prof. Dr. Peter Zieme) 氏によって、

1) *Turfan, Khotan und Dunhuang: Vorträge der Tagung „Annemarie v. Gabain und die Turfanforschung“*, veranstaltet von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften in Berlin (9. –12, 12. 1994). Herausgegeben von Ronald E. Emmerick, Werner Sundermann, Ingrid Warnke und Peter Zieme.

2) *Üçüncü Uluslar Arası Türk Dili Kurultayı 1996, Türk Dil Kurumu, Ankara (Turkey)*. (第 3 回国際トルコ言語集会, 発表: 9 月 24 日)。

“Uighur Versions of the Lotus Sutra with Special Reference to Avalokiteśvara’s Transformation Bodies” と題して、ベルリン所蔵のトルコ語法華経断片についてこれまでに同定された資料の概要が報告された³⁾。観音経を除く法華経トルコ語訳の断片資料の言語的特徴からも、2系統の翻訳を推測することができる⁴⁾。さらに百濟康義氏の発見と研究になるトルコ語『妙法蓮華経玄賛』(大正蔵経 No. 1723)に含まれる法華経原典のトルコ語訳との関連も今後の課題である[百濟 1980; 1983; 1990]。ただ2訳の平行箇所を比較できるほど、資料は充足していない。残存資料のより豊かな観音経トルコ語訳の研究を優先させることが差しあたって重要に思われる。

I トルコ語文の復元

まずテキスト資料の充足は先の6写本に加えて18断片、総計24点となり、内1点は版本の断片である。以下に表示する。テキスト資料の記号は以後表示のように行う⁵⁾。

番号	テキスト記号	文書所蔵記号	形式	行数	基準行番号 (大正行)	分類	出版 (図版)
ベルリン本							
1	B1	(旧B) 現存不明	THY 10, 18	卷子	61 75-148 (57 a 5-57 b 16)	I	Müller 1910
2	B2	(旧C) Mainz 733	THY 32, 39, 60	卷子	61 7-70, 92-114 (56 c 5-57 a 27)	I	Tekin\$ 1960 (c)
3	B3	(旧D) Mainz 289	THY 54 a	卷子	11 143-152 (57 b 14-19)	I	Tekin\$ 1960 (d)
4	B4	U 5095	T III T 540	卷子	8 1-4 (56 c 2-5)	I	Digitales Turfan
5	B5	U 5063	TIII M 115, 508	卷子	15 14-30 (56 c 7-16)	I	Digitales Turfan
6	B6	U 2267	T I 640	貝葉	r 5 v 5 109-115 (57 a 25-27)	I	Digitales Turfan
7	B7	U 5038	T II Y 63	卷子	14 118-132 (57 a 29-b 9)	I	Digitales Turfan
8	B8	U 4834	T I	卷子	7 171-178 (57 b 5-6)	I	Digitales Turfan
9	B9	U 4837	T I 605	卷子	11 172-184 (57 c 6-14)	I	Digitales Turfan
10	B10	U 5050	TIII 273, 509	卷子	13 [1-8] (56 c 2-6)	II	Digitales Turfan
11	B11	U 3072	T II Y 14	貝葉	r 7 v 7 [27-39] (56 c 14-21)	II	Digitales Turfan
12	B12	Ch/U 7010	T II 1715	写本	5 [96-100] (57 a 17-19)	II	Digitales Turfan
13	B13	U 5127		写本	7 [108-111] (57 a 24-26)	II	Digitales Turfan
14	B14	U 3095	T II Y 17, 500	貝葉	r 6 v 6 [113-116] (57 a 27-29)	II	Digitales Turfan

3) 『ユーラシア古語文献の文献学的研究』NEWSLETTER No. 13 (2005/9/22) 参照 (<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia/>)。

4) たとえば、U 1511 (XXIV. chapter: T 262, Vol. IX, 55 c 5-18, Zieme 2000) は第1訳, XV. -XVII chapter: 27 Fragments of the Berlin Turfan Collection belonging to the V. scroll: (U 3169, Mainz 281, U 3162, U 2615 +U 2557 +U 3516, U 3549 +U 2377 +U 3300 a, U 2760 (=U 2274), U 3304 +U 3300 b, U 3321 a, U 2770, U 2427, Mainz 508, Mainz 366, U 3297, U 3294, U 3301, U 3314 +U 2422, Mainz 261, U 2674, U 3173, U 2278) は第2訳に相当する[Zieme 2000]。

5) 旧 A, B, C, D, E, F: 小田 1991 参照。なお、B1 (旧 B) は原本所在不明のために Müller 1910, Uigurica II. 3: 14-20 を参照する。

15	B 15	U 3129 a T II Y 64, 500	貝葉	r 7 v 7 [129-137] (57 b 5-10)	II	Digitales Turfan
16	B 16	Mainz 805 TII M 189	印刷	23 [131-139] (57 b 7-13)	II	Digitales Turfan
17	B 17	Mainz 286 TII S	写本	12 [126-181] (57 c 8-13)	II	Digitales Turfan
18	B 18	U 2121	貝葉	r 4 v 3 不明	II	Digitales Turfan
19	B 19	U 5124	写本	5 [114-116] (57 c 28-29)	II	Digitales Turfan
20	B 20	U 4893 T II 935	写本	6 不明	II	Digitales Turfan
サンクトペテルブルク本						
21	S 1 (旧 A)	SI D 2	卷子	237 1-229 (56 c 2-58 b 7)	I	Radloff 1911
22	S 2	SI Kr. II 11/1 rv	貝葉	r 14 v 14 [81-100] (57 a 10-23)	II	本誌図版 2
所在不明本						
23	H (旧 E)	Tachibana 写真	貝葉	r 21 v 22 [45-68] (56 c 22-57 a 4)	II	Haneda 1915
24	O (旧 F)	旧梁素文所蔵	卷子	78 [93-128] (57 a 14-57 b 6)	II	Oda 1991

上記テキスト資料記号に基づく 24 点によりテキスト復元の結果、2 系統のトルコ語訳を再構成することができる。漢語「観世音菩薩」に対応するトルコ語に *Quansī-’im pūsar* と *Quansī-’im bodistv* の 2 系統があり、第 1 訳と第 2 訳を識別する用語とみなしてよいことについて、少しく詳述する。第 1 訳とするサンクトペテルブルク資料 S 1 写本は首尾を備える完本に近いものである（図版 1 はその巻首部分）。その他の *Quansī-’im pūsar*（観世音菩薩）の用語を含む断片資料も、同訳異写本と考えて誤りない。前回（1991）、S 1 (A) 写本のほか B 1 (B)、B 2 (C)、B 3 (D) の 3 写本がそれにあたると同定した。今回 B 4 から B 9 の 6 写本もこれに属することを確認した。ただ漢語本の偈文にあたる部分は新たに見つからなかった。残念ながら、S 1 写本の偈文部分における欠落について何らの示唆をうることはできなかった。次に第 2 訳と目される *Quansī-’im bodistv*（観世音菩薩）の用語を持つ断片資料について現存第 1 訳本に比べて不十分で、しかもいくつかの断片群から構成される。B 12、B 13、B 14、B 19、S 2 と O 写本の 6 写本及び B 15（写本）と B 16（版本）の 2 本はそれぞれ重なり合うところがあり、各同訳系統のテキストに違いはないが、他の断片（B 10、B 11、B 17、B 18、B 20）も、「観世音菩薩」に対して “*körgāli ärklig quansī-’im bodistv*”〈観想する力ある観世音菩薩〉と共通する冠称を持つことから、これらが同系統の翻訳に属する可能性はたかい。疑問が起こらない限り、以上は第 2 訳の同訳異本と仮定しておきたい。なお第 2 訳において以前に発表した O (F) 写本に錯簡のあることに気づいた。梁素文旧蔵の卷子に装丁しなおされたとき、一部断片が不正確に組み入れられた結果である⁶⁾。他の写本との照合によって明らかになった。

6) F 写本 [小田 1991: 21] の [13]31-[19]37 (図版 B 部分) の行末一部にあたる断片。

II テキストの特徴

すでに知られるように、第1訳の冒頭題名の一部が敦煌の藏経洞出土品である大英図書館 Or. 8212 (122) に書かれている⁷⁾ので、第1訳の成立は少なくとも10世紀にさかのぼる。一方1330年の雲南遠征祈願文に韻文化された詩行の語句は第2訳の引用にちがいない [Hazai 1970; 小田 1984; Zieme 1985: 121-126 (Text 20)]。またベルリン資料にヤルホト (Y), ムルトゥク (M) 及びセンギム (S) などの出土記号がある。つまり10世紀から14世紀にいたるトルファン地方そして敦煌や中国内地のトルコ語を話す人びとの間に流通した仏教文献である。第1訳と第2訳のトルコ語資料について分析検討することは、トルコ語仏教文献の言語文化史研究に道を開く重要な課題であると考えている。たとえば、第1訳の S1 写本は *kör-*〈みる〉の使役形に *körgit-*〈示す, 現す〉を使っているが、他の第1訳写本 (B1, B2, B3, B7) は *körtgür-*〈見せる, 示す, 現す〉であって、上記の藏経洞出土品もそうである。後者 *körtgür-*の語形は、エルダルの『古トルコ語の単語形成』 [Erdal 1991: 750-751] によれば、ほとんどの用例はマニ教文献である。仏教文献では、寡聞ながら、ソグド文字仏教文献 (Gabain 1976, XVa: Mainz 433 v 2; Fedakâr 1994: Mainz 309 A 165 (3)) などのほか、八陽経初訳本とこの経典写本を含む法華経、および弥勒下生経類本 (Maitrisimit)⁸⁾ などいくつかに在証があるにすぎない。次にこの経典に出典頻度の高い *qurtul-*~*qutrul-*と *qurṭar-*についてエルダルの *kuṭrul-* (*qutrul-*)〈救われる〉 (OTWF (II): 667) と *kuṭgar-* (*qurṭar-*)〈救う〉 (OTWF (II): 735) の項目をたてて、多くの例証を挙げる。両語の語源は *kuṭur-*〈限界を超える〉と想定する。この見解はハミルトンの解釈に通じ、*qurtul-* (Hamilton 1986: (II) 237) を *qutrul-*の音位転換とし、*qurṭar-*を *qutrul-*の変化とする。我われの観音経トルコ語訳によれば、第1訳では *qurtul-*、第2訳は *qutrul-*でなければならない。つまり後者が音位転換であると私はみたい。後者の語形は第1訳に属する。そこでいわゆるウイグル文字の字母や文法的接辞に範囲を広げて、写本・版本資料を分析検討する。すでに資料の相対的年代を論ずべく、これまでに借用語、正書法や文法形態などの検討を試みてきた [小田 1991: 8-14; 小田 2000: 141-146]。

ここでは集約する形で、第1訳と第2訳を比較表示する。なお、本来第1訳の要素に白○じるし、第2訳には黒●じるしを標識とする。

7) Hamilton 1986, Tome I: 29 (1'); Tome II: 273 (Or. 8212 (122) verso: *d'une main plus petite*).

8) Maitrisimit の例は2例のみ: Tekin 1980 (I. Teil): 202 (Tafel 80. verso 9 (*kyrṭkwṭwky*)); Geng & Klimkeit 1988: 276 (18. Blatt (?), recto: 18 a (?), (3750) 20: *körtgürdüm*). ただしテキン研究の対象であるベルリン写本には、上記 Tafel 80 と同じ文面の別写本 Tafel 216 v 8 で *kyrṭkwṭwky* (*kirtgüngüçi*) とあり、テキンは前者 Tafel 80 を誤写とみている。

テキストの比較表

項目別

番号	類別	項目	第1訳	標識	第2訳	標識
(1)	用語	「観世音菩薩」	quanši-'im pular (B1, B2, B3, B4, B5, B7, B9, S1)	○	quanši-'im bodistv (B10, B12, B14, B15, B16, B17, B19, B20, S2, H, O)	●
(2)	用語	「菩薩」	bodistv(B1, B2, B5, S1)	○	bodistv(B10, B14, B15, B16, B19, B20, S2, H, O)	●
(3)	語彙	〈示現する〉	körtgür-(B1: 27, 29, 31, 33, 38, 40, 43, 49, 51, 54, 57, 59; B2: 56, 58, 60, 61; B3: 4, 8, 11; B7: 2, 4, 6, 8, 11, 12) körgit-(S1: 104, 106, 108, 110, 112, 114, 116, 119, 121, 124, 126, 128, 130, 133, 135, 139, 141, 145, 147, 150) körgüt-(189)	○ ●	körgit-(B13: 1; B15: 4, 10; B19: 3; B20: 6; O: 33, 38, 44, 49, 54, 70) körgid-(B16: 7)	●
(4)	語彙	〈救われる〉	qurtul-(B1: 26, 28, 30, 32, 34, 39, 41, 48, 50, 52, 55, 58, 61; B2: 9, 17, 20, 27, 38, 56, 57, 59, 61; B6: 2, 5, 8; S1: 102, 105, 107, 109, 111, 113, 115, 118, 120, 122, 125, 127, 129, 131, 134, 137, 140, 143, 146) qutγul-, qurtal-(B7: 7, 9) qutrul-(B1: 44, 46; S1: 12, 23, 29, 41, 57)	○ ?	qutrul-(B11: 5; H: 30)	●
(5)	語彙	〈能力〉	ärdäm(B1: 1; B2: 40; S1: 60, 71, 149, 189, 210, 215, 219)	○	ädräm(B15: 13; B16: 10; H: 34)	●
(6)	文法	奪格 +dA(n)/+tA(n), +dIn/+tIn	ornīnta(S1: 4), ämgäkintä (S1: 12), yäklärdä(B5: 13; S1: 23), buqaγuda (B2: 27), yavlaqta (B2: 38; S1: 54, 57), biligdä (S1: 63), biligdän (B2: 42), biligintä(S1: 69), ögüzdä(S1: 177)	○	adatīn(H: 29), tiltaydīn(O: 35), nomlardīn(O: 46)	●
(7)		具格 +Un, +In	köngülün(B2: 34), köngülin(S1: 51)	○ ●	köngülin(H: 18, 40)	●
(8)	音韻 (字母)	音価 α/a, i/ī	asγ(B1: 23; B2: 53), aγr(B1: 2; B2: 31), qataγ(B1: 12), sataγ(B2: 13, 29, 30, 31, 33, 38)	○		
(9)	(子音)	d/t, s/z 混同			tükädinčsiz(O: 10), utunsar(O: 8)	●

テキストの比較表
資料別

番号	記号	分類	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	q̇ %	ṡ %
1	B 1 (旧 B)	I	○	○	○	○●	○	—	—	○	—	71.2	2.2
2	B 2 (旧 C)	I	○	○	○	○	○	○	○	○	—	80.5	1.3
3	B 3 (旧 D)	I	○	—	○	—	—	—	—	—	—		
4	B 4	I	○	—	—	—	—	—	—	—	—		
5	B 5	I	○	○	—	—	—	○	—	—	—		
6	B 6	I	—	—	—	○	—	—	—	—	—		
7	B 7	I	○	—	○	?	—	—	—	—	—		
8	B 8	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
9	B 9	I	○	—	—	—	—	—	—	—	—		
10	B 10	II	●	●	—	—	—	—	—	—	—		
11	B 11	II	—	—	—	●	—	—	—	—	—		
12	B 12	II	●	—	—	—	—	—	—	—	—		
13	B 13	II	—	—	●	—	—	—	—	—	—		
14	B 14	II	●	●	—	—	●	—	—	—	—		
15	B 15	II	●	●	●	—	●	—	—	—	—		
16	B 16	II	●	●	●	—	—	—	—	—	—	38.5	9.1
17	B 17	II	●	—	—	—	—	—	—	—	—		
18	B 18	II	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
19	B 19	II	●	●	●	—	—	—	—	—	—		
20	B 20	II	●	●	●	—	—	—	—	—	—		
21	S 1 (旧 A)	I	○	○	●	○●	○	○	●	—	—	59.5	4.2
22	S 2	II	●	●	—	—	—	—	—	—	—	84.6	0
23	H (旧 E)	II	●	●	—	●	—	●	●	—	—	33.3	54.5
24	O (旧 F)	II	●	●	●	—	—	●	—	●	●	84.8	17.5

註：上表の右％は、資料の正確度の目安となる発音異同符号つき q̇ と誤って付した ṡ のパーセンテージであり、前者は 100% に近いほど、後者は 0% になるほど、書写の正確度がたかいとみる。

上表において、10 世紀ないし 11 世紀の翻訳家シンコ・シェリ・トゥトゥングによってトルコ語に訳された金光明経ほか、いわゆるウイグル仏教写本一般は *qutrul-* が通用した。ところが、上記の比較表から、*qutrul-* は *qurtul-* の音位転換と私はみる。第 1 訳は *qurtul-* を考えねばならない。B 1 写本と S 1 写本における *qurtul-* と *qutrul-* の両用はのちの書写に起因すると考えられる。また第 1 訳は *körtgür-*、第 2 訳は *körgit-* と使い分けられている。第 1 訳 (S 1) が *körgit-*、*körgüt-* であることは書写の後期性を物語るにちがいない。11 世紀のカラハン朝文献 (クタドック・ビリグ、カーシュガリー辞書) [Arat 1979; Dankoff 1985] では、すでに第 2 訳の *körgit-* が一般化している。*körtgür-* はみあたらない。

III 結 語

第 1 訳と第 2 訳の間には、言語環境に変化のあったことを推測させる。第 1 訳は文法形態の奪格 + *dIn/ + tIn* はいまだなく、位格 + *dA/ + tA* の併用が一般的であったことを示す。インド來源の借用語からすれば、漢語とソグド語の文化的環境のなかで翻訳されたことは先回りに述べた。たとえば、天龍八部衆の名称は龍を除けば、主な用語はソグド語形による。この

語形は初期漢訳經典の音写漢字に対応する。たとえば、大正藏經 197 番（康孟詳）によれば、skt. gandharva: 乾沓和 *kntrv*, skt. asura: 阿須倫 *asur*, skt. kimnara: 甄陀羅 *kantar* (*kynntr*), skt. mahoraga: 摩休勒 *maxuruk* を仮定することができる。これらの語形は今のところ、この観音経の第 1 訳と八陽経の初訳にのみ残る。あるいは四部衆の「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷」に対して、漢語とソグド語の構成からなる “*toyin samnanč upasi upasanč*” の慣用は、トルコ語ウイグル仏教の全期を通して行われた。元朝のモンゴル仏教揺籃期にウイグル仏僧の関与があったように、漢語仏典のトルコ語訳にソグド人の支援があったことを推測させるのである。

第 2 訳は文法形態の奪格 + *dIn*/+ *tIn* が現れる。トハラ仲介語形とみられる借用語も目に付くようになる (*mxabrxmi* << skt. mahābrahman 大梵天, *sančanačayi* << skt. samciñjaya 僧慎爾耶 (天大將軍), *sartavaxi* << skt. sārthavāha 商主, *vaiširavani* << skt. vaiśravana 毘沙門天)。なおウイグル仏教文献ではほとんど、音位転換した *qutrul-* (< *qurtul-* 救われる) 及び *ädräm* (< *ärdäm* 能力) の語彙が一般化するのである。さらに “*körgäli ärklig quansi-’im bodistv*” (観想する力ある観世音菩薩) という表現は広く通用したらしく、随所に散見されるところである⁹⁾。

以上資料の充足が必ずしも十分ではないが、2 系統のトルコ語が漢語原典からの翻訳であることは疑いない。ただ第 1 訳と第 2 訳の間にはトルコ語の言語環境に違いがある。第 1 訳はより古く、ソグド語やマニ教文献との言語的共通性を有するが、翻訳の年代の設定は容易ではない。ただ第 2 訳の時代にも引き続き書写されてきた形跡は写本の語彙にも現れている。第 2 訳はウイグル仏教の最盛期に翻訳され、流布したのではなかろうか。言語的特徴はもとより、観世音菩薩の 33 身への示現に関して、詳細な註釈つきであることがそれを物語るように思われる。ここでは以下に、新たに加えられたサンクトペテルブルク資料 S 2 のトルコ語転写テキストを、邦訳と漢語原典とを対照して掲載する。

IV サンクトペテルブルク資料 S 2

凡例

漢語原典は大正新修大藏經 卷九：No. 262, 妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五による。下付き小字は頁段行数を示し、上付き 4 桁数字は 1000 から 1305 まで、トルコ語訳テキストと邦訳の照合のために区割りする。転写テキストの下付き記号はテキスト資料の記号-行数、転写書体のゴチックは破損欠落の復元、イタリックは損壊の修復、〈 〉は脱落の補填等である。

9) 庄垣内 2003: 187 (*körgäli ärklig aryavlokidišvr bodistv*) ほか; Wilkens 2007 (Teil 1): 132 (1270: *körgäli ärklig bodistv*) ほか。

なお、ベルリン現存資料はU番号、Mainz番号によってDigitales Turfan-Archiveの映像を検索できるので、転写掲載も割愛する。

S 2 : SI Kr. II 11/ 1 rv (microfilm R 33/ 375 – 378)

TEXT

recto

- 1 S2:1 ¹⁰⁹¹ tīnly-lar *buyansız bolmaz-lar*¹⁰⁹² *anı*
 2 S2:2 üçün tīnly-lar qamay-un ¹⁰⁹³ barča bo
 3 S2:3 bodistv-qa umuγ inay tutup atın
 4 S2:4 atayu yūkūnmiş krgāk ¹⁰⁹⁴ yänä ymä
 5 S2:5 alqīnčsüz *kögüz* bodistv ¹⁰⁹⁵ antay bir
 6 S2:6 kiši bolup : iki yitmiş kolti gang
 7 S2:7 ögüz içintäki qum sanınča bodistv-
 8 S2:8 lar atın atasar tutsar : ¹⁰⁹⁶ munča
 9 S2:9 tänglig ök bodistv-*lar*qa bir
 10 S2:10 *ažun-ta yigülük ašin* ičgün :
 11 S2:11 kädgülük tonin kädimin *töšägülük*
 12 S2:12 töl(ä)tin *töšäkin* : iglämiş-däki
 13 S2:13 otin ämin ymä üzüksüz tapinsar
 14 S2:14 udunsar : ¹⁰⁹⁷ kōngül-üngdä nätäg ol : ¹⁰⁹⁸ bo

verso

- 1 S2:15 ¹¹⁰⁴ bir tæg ärür : ¹¹⁰⁵ *yuz ming tümän klp?*
 2 S2:16 ödlär-tä yip aşap tükädinčsüz
 3 S2:17 ärti : ¹¹⁰⁶ alqīnčsüz *kögüz* bodistv : ¹¹⁰⁷ bo
 4 S2:18 körgäli ärklig qvanši-im bodistv-
 5 S2:19 ning atın atamiš ¹¹⁰⁸ buyan ädgü qilinč-
 6 S2:20 ning asıγ-i tusu-si oq muntaγ
 7 S2:21 yitīnčsüz tutunčsuz *ulsuz* tüpsüz
 8 S2:22 ärür tip yrliqadı ¹¹⁰⁹ alqīnčsüz *kögüz*
 9 S2:23 bodistv yänä tngri tngri burxan-
 10 S2:24 -*qa inča tip* ötünti : antay
 11 S2:25 ärsär *tip* ...? ... ¹¹¹⁰ tngrim ¹¹¹¹ bo
 12 S2:26 körgäli ärklig qvanši-im bodistv
 13 S2:27 ¹¹¹² bo alp lokadatu atly *yirtinčüdä*
 14 S2:28 nätäg yangin *yorıyu tögir* ärki :

【比較】第1訳

¹⁰⁹¹ol ämgäki näng (86) yoqsuz bolmaz : ¹⁰⁹²
 anı üçün B1:9 qamay yalnguqlar ¹⁰⁹³alquγun
 (87) quanši-im pular atın atamiš krgāk : ¹⁰⁹⁴
 B1:10 taqı ymä (88) alqīnčsüz *kögüz* bodistv
 inča biling ¹⁰⁹⁵ kim qayu B1:11 tīnly (89) altmiş
 iki koti sanı gang ögüz içintäki qum sanınča
 bodistvtlar B1:12 atın (90) atayu tapınu udunu
 qataylansar ölüm küningätägi atayu (91)
 tapınu B1:13 udunu ägsütmasär ¹⁰⁹⁶ ašin ičgün
 tonin tonayusın (92) tölätin B2:41 *töšäkin* otin
 ämingätägi alqu tükäti tægürsär (93) ¹⁰⁹⁸ B1:14
 ol ädgü qilinč ärüş mü titir ¹⁰⁹⁹ B2:45 alqīnčsüz
kögüz bodistv (94) ¹¹⁰⁰ol ädgü qilinč B1:15
 ärtinğü üküš titir tngrim tip ötünti : B2:46
¹¹⁰¹tngri (95) burxan yänä inča tip yrliqadı :
¹¹⁰² B1:16 birök taqı bir kiši bir tāk quanši-(96)
 -B2:47 im pular atın atayu ¹¹⁰³ tāk bir ödün
 tapınu B1:17 udunu atayu tæginsär (97) ¹¹⁰⁴ ol
 kiši ädgü B2:48 qilinč i ongräki kiši ädgü qilinč
 bir B1:18-lä tüz (98) titir bo iki kišining
 ädgü B2:49 qilinč bir tæg tüz adruqsuz (99)
 titir ¹¹⁰⁵ ming B1:19 tümän klp öd nomlasar
 taqı B2:50 alqīnmaγay : ¹¹⁰⁷ quanši-(100)-im
 pular atın ata B1:20-imış urınta ¹¹⁰⁸ ädgü
 qilinčly asıγi (101) tususi antay B2:51 titir : ¹¹⁰⁹
 taqı ymä B1:21 alqīnčsüz *kögüzlüg* (102)
 bodistv tngri burxanqa inča tip B1:21/B2:52
 ötüg ötünti : ¹¹¹⁰ tngrim (103) ¹¹¹¹ bo quanši-
 im pular ¹¹¹²näčükün nä al B1:23 čävišin bo
 čambudvip B2:53 yirsuvda (104) yoriyur.

【邦訳】

(表) ¹⁰⁹¹衆生は福なしとならず。¹⁰⁹²その故に、衆生は¹⁰⁹³ことごとくみなこの菩薩へ帰依し、その名を称え礼拝しなければならぬ。¹⁰⁹⁴そしてまた無尽意菩薩よ、¹⁰⁹⁵かような一人がある。62億の恒河のなかにある沙ほど菩薩の名を称え受持すれば、¹⁰⁹⁶これに等しくも菩薩らに一生において食すべき飲食、着るべき服飾、寝るべき布団をもって、病気になるどころ薬草をもっても、絶えず供養すれば、¹⁰⁹⁷汝の心はいかなるか。¹⁰⁹⁸これ

(裏) 一つのごときなり。¹¹⁰⁵百千萬劫の時に飲食し尽くせなかった。¹¹⁰⁶無尽意菩薩よ、¹¹⁰⁷この観想せる力ある観世音菩薩の名を称えたる¹¹⁰⁸福德業の利益もこのように際限がなく捉えられない底なしなりとお言葉があった。¹¹⁰⁹無尽意菩薩はまた天の天たる仏陀にそのように申し上げた。そのようにとは、？、¹¹¹⁰わが天よ、¹¹¹¹この観想せる力ある観世音菩薩は¹¹¹²この難しい世間という世界にいかように歩み行くか。

【訳註】

表6：iki yitmişは漢語「六十二」の正しいトルコ語表現である。これに対して第1訳の altmış ikiは漢語の字面を直訳したものと解される。

表裏の間に相当の間隔があるのは、断片の前部が破損欠落のためであろう。他の写本で補えば、次のようである。¹⁰⁹⁸bo o:2 [] (...) [] üküş tälim ärür mü [] o:3 [] yrliqadi: [?] ¹⁰⁹⁹alqinçsiz kögüz bodistv ¹¹⁰⁰ärtingü üküş o:4 titir: atı kötrülmiş tngirim tip ötünti: ¹¹⁰¹tngri tngrişi o:5 burxan yänä inça tip yrliqadi: ¹¹⁰²birök yänä ikinti taqı o:6 bir kişi bo körgäli ärklig quansi-im bodistvning atın o:7 atasar: ¹¹⁰³äng mintin bir ödün kyä ärsär ymä tapınsar o:8 **ayrlasar(?)** utunsar: ¹¹⁰⁴bo iki tör-^{B12:2}-lüg kişining buyan ädgü o:9 qılınçı tüp tüz adırsız s2:15 bir tæg ärür: 重なる部分の **O** 写本と **B 12** 写本との間にほとんど相違はない。

裏3：ärti: titir (**O**: 10).

この第2訳が第1訳とは別の訳述であることは歴然としている。quansi-im pusar と quansi-im bodistv, bodistv と bodistvt の対照も明確である。

【漢語原典】

^{57a10}若有衆生。恭敬¹¹礼拝観世音菩薩。¹⁰⁹¹福不唐捐。¹⁰⁹²是故衆生。¹⁰⁹³皆¹²応受持観世音菩薩名號。¹⁰⁹⁴無尽意。¹⁰⁹⁵若有人¹³受持六十二億恒河沙菩薩名字。¹⁰⁹⁶復尽形供¹⁴養飲食衣服臥具醫藥。¹⁰⁹⁷於汝意云何。¹⁰⁹⁸是¹⁵善男子善女人功德多不。¹⁰⁹⁹無尽意言。¹¹⁰⁰甚多世¹⁶尊。¹¹⁰¹佛言。¹¹⁰²若復有人受持観世音菩薩名號。¹¹⁰³乃¹⁷至一時礼拝供養。¹¹⁰⁴是二人福正等無異。¹¹⁰⁵於¹⁸百千万億劫不可窮尽。¹¹⁰⁶無尽意。¹¹⁰⁷受持観世¹⁹音菩薩名號。¹¹⁰⁸得如是無量無辺福德之利。²⁰¹¹⁰⁹無尽意菩薩白佛言。¹¹¹⁰世尊。¹¹¹¹観世音菩薩。¹¹¹²云²¹何遊此娑婆世界。¹¹¹³云何而為衆生說法。¹¹¹⁴方²²便之力。¹¹¹⁵其事云何。¹¹¹⁶佛告無尽意菩薩。¹¹¹⁷善男²³子。

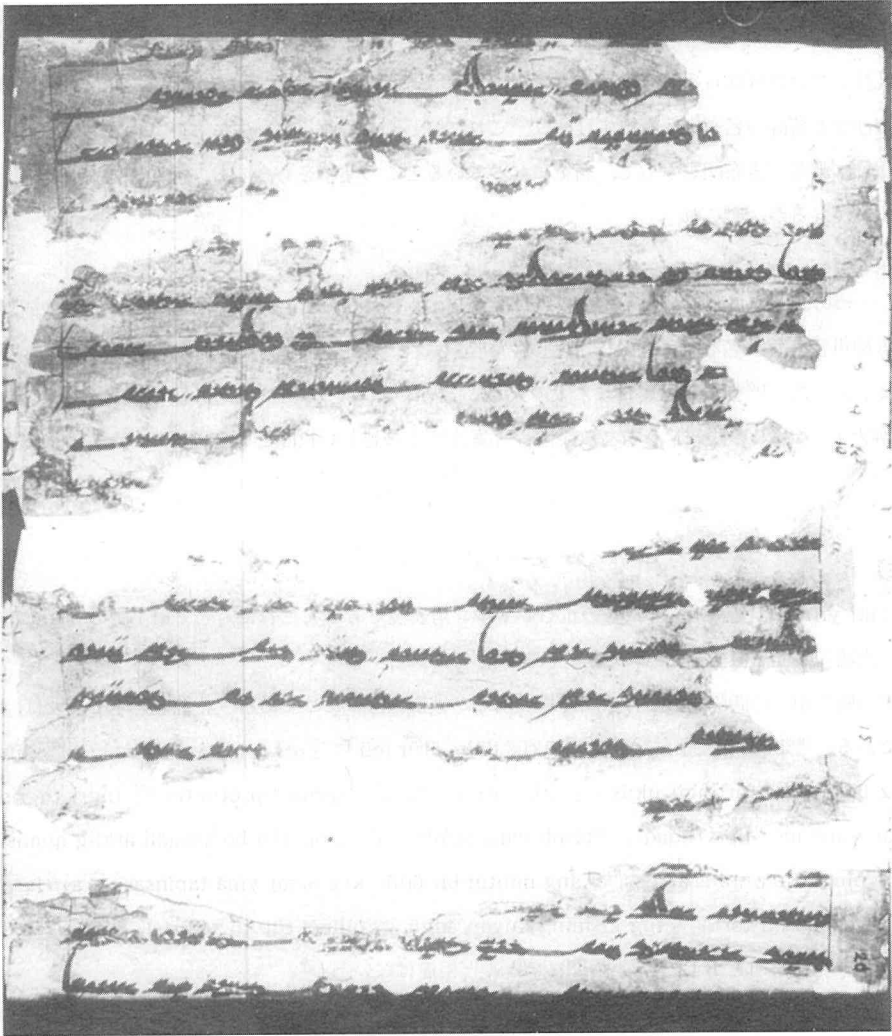
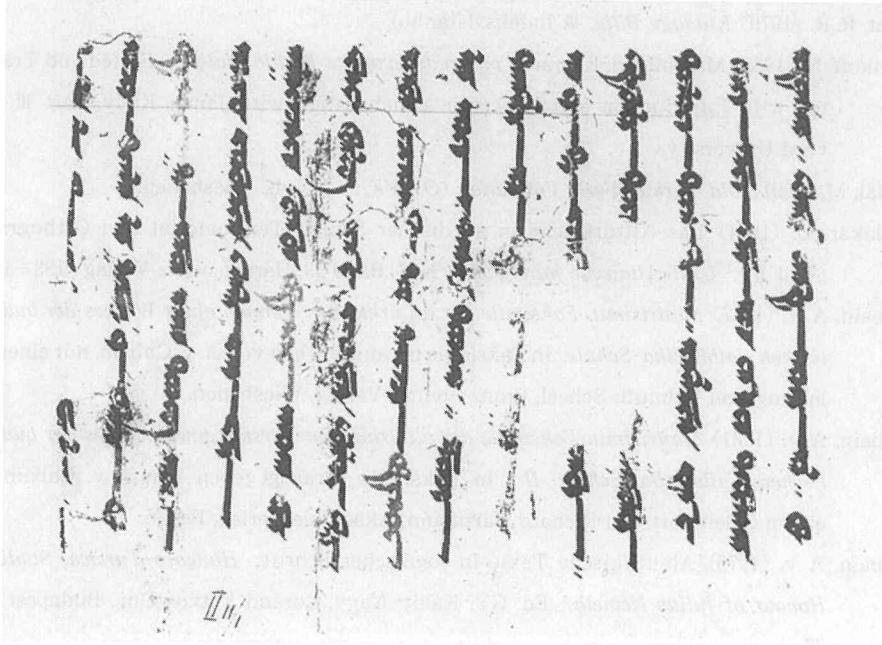


図1 サントペテルブルク資料 S1 (SI D2) 巻首部分 20
行 [財団法人東洋文庫所蔵 (許可番号 19-62)]

漢語原典および他のトルコ語写本と比較するとき、5行分の破損欠落があると推定される。
したがってこの写本の総行数は229行と断定する [小田1991: 3-5]

表



裏

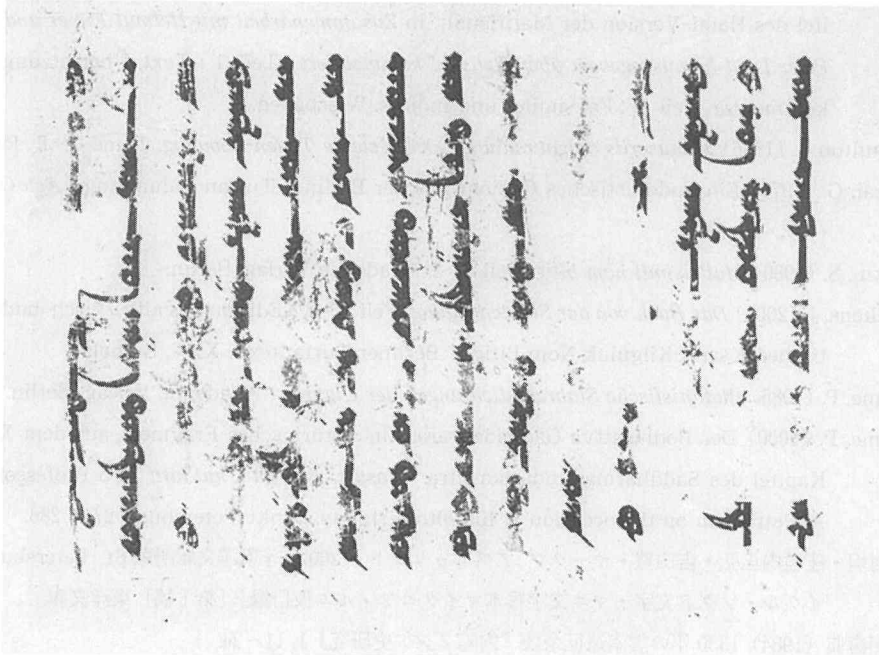


図2 サントベテルブルク資料 S2 (SI Kr. II 11/1 recto, verso)
 [財団法人東洋文庫所蔵(許可番号19-62)]

表面末行と裏面初行の間にかなり間隔があるので、8行前後の破損欠落があると推定される。

参考文献

- Arat, R. R. (1979) *Kutadgu Bilig*, III Indeks. Istanbul.
- Dankoff, R. (1985) Maḥmūd al-Kāšgarī, *Compendium of the Turkic Dialects*. Edited and Translated with Introduction and Indices in collaboration with James Kelly, Part III. Harvard University.
- Erdal, M. (1991) *Old Turkic World Formation [OTWF]*. 2 Vols. Wiesbaden.
- Fedakār, D. (1994) Das Alttürkische in sogdischer Schrift Textmaterial und Orthographie (Teil II). *Ural-Altäische Jahrbücher*. N. F. Band 13, Harrassowitz Verlag: 133 – 157.
- Gabain, A. v. (1957) *Maitrisimit. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule*. In Faksimile herausgegeben von A. v. Gabain, mit einer Einleitung von Helmuth Scheel, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.
- Gabain, A. v. (1961) *Maitrisimit. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāṣika-Schule, II*. In Faksimile herausgegeben von A. v. Gabain, mit einem Geleitwort von Richard Hartmann, Akademie Verlag, Berlin.
- Gabain, A. v. (1976) Alt-türkische Texte in sogdischer Schrift. *Hungaro-Turcica. Studies in Honour of Julius Németh*. Ed. GY. Káldy-Nagy, Loránd Eötvös Uni., Budapest: 69 – 77.
- Geng, Sh. & H.-J. Klimkeit (1988) Das Zusammentreffen mit Maitreya. Die ersten fünf Kapitel des Hami-Version der Maitrisimit. In *Zusammenarbeit mit Helmut Eimer und Jens Peter Laut herausgegeben, übersetzt und kommentiert*. Teil 1 : Text, Übersetzung und kommentar. Teil II : Faksimiles und Indices. Wiesbaden.
- Hamilton, J. (1986) *Manuscripts ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*. Tome I – II. Paris.
- Hazai, G. (1970) Ein buddhistisches Gedicht aus der Berliner Turfan-Sammlung. *ActaOH* 23 (1), 1 – 21.
- Tekin, Ş. (1980) *Maitrisimit nom bitig*, Teil 1 – 2. Akademie Verlag, Berlin.
- Wilkins, J. (2007) *Das Buch von der Sündentilgung*, Teil 1 – 2 (Edition des alttürkisch-buddhistischen Kšanti Kilguluk Nom Bitig). Berliner Turfantexte XXV, Brepols.
- Zieme, P. (1985) *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Akademie Verlag, Berlin.
- Zieme, P. (2000) Der Bodhisattva Gadgadasvara. Ein alttürkisches Fragment aus dem XXIV. Kapitel des Saddharmapuṇḍarikasūtra. *Vostok. Istorija i kul'tura*. To Professor Yu. A. Petrosyan on the occasion of his 70th birthday. Sankt-Petersburg, 271 – 286.
- 梅村坦・庄垣内正弘・吉田豊・ヤークブ アブドゥリンド (2002) 『東洋文庫所蔵 St. Petersburg ウイグル・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録』 [第1稿] 東洋文庫.
- 小田壽典 (1984) 1330年の雲南遠征余談『内陸アジア史研究』1, 11 – 24.
- 小田壽典 (1991) トルコ語『観音経』写本の研究『西南アジア研究』34, 1 – 32.
- 小田壽典 (2000) トルコ語佛教寫本に関する年代論 —— 八陽經と観音経 —— 『東洋史研究』59 (1).

- 百済康義（1980）ウイグル訳『妙法蓮華経玄賛』（1）『仏教学研究』36, 49-65.
- 百済康義（1983）妙法蓮華経玄賛のウイグル語断片『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 185-207.
- 百済康義（1990）ギメ美術館所蔵『妙法蓮華経玄賛』ウイグル訳断片『龍谷紀要』12（1）, 1-30.
- 庄垣内正弘（2003）『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究 —— ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト ——』京都大学大学院文学研究科.

（豊橋創造大学）